

本年度テーマ	主体的な学びや協働的な学びをととした学習のあり方について	事業内容	高知南：グローバル教育プログラム（探究型学習）について
--------	------------------------------	------	-----------------------------

概要・目的

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、平成 3 0 年度をイメージして協議する。

P平成 29 年度の当初計画	D平成 29 年度の取組状況	CXA課題（●）と今後の取組の方向性（→）
4つの方向性と7つの方策 探究型学習プログラム+英語教育プログラム 協働による目標達成 方向性① 授業者は指導と評価の一体化を目指す 1. 生徒との目標の共有、目標達成につながる学習活動の設定と評価を通して、学習指導の改善を行う。 - 生徒の学びのプロセスの見取り - 目標に沿った評価方法の研究 - 英語教育での学習到達目標（CAN-DO リスト）の活用 - グローバル教育校内研修会における教科横断型の研究協議 方向性② 生徒は自己の学びを適切に振り返る 2. 主体的な学びにつながるよう、生徒の振り返りの手立てを工夫する。 方向性③ 学校は教科会やチーム会を活性化する 3. 高知南が目指す「グローバル人材」を再確認し、育てたい資質・能力を教科横断的に育成する授業づくりについて、学校全体で取り組む。 4. 組織的・協働的な授業づくりを目指し、教科会、チーム会を活性化 する。 方向性④ 学校と教育センターは研究成果を普及する 5. 3 年間の研究成果を集約し、研究の過程や実践事例をまとめる。 6. 教員の授業づくりに対する意識の変化や生徒の学びに関する変容を見取るために、意識調査等を実施し、分析する。 7. 県内の教員のニーズに応えられるよう、教材研究や授業づくり、評価のポイント等の資料を作成する。	取組① ○目標の明確化と生徒の学びの見取りについて ・全教職員対象の公開授業を設定した。公開授業では、授業者が授業のねらいを明確にし、目標を生徒と共有する授業が多く見られた。 ・公開授業後の研究協議では、目標に沿って本時の生徒の学びを具体的に評価することについて、授業者と参観者が振り返りを行い、授業の改善点を協議した。 ※指導主事が参観し、協議を行った授業数 国語・・・6、社会・・・8、数学・・・17、理科・・・6、英語・・・12、保健・・・4、家庭・・・4、芸術・・・4、情報・・・1、道徳・・・2 計 64 （授業後の研究協議 33） ・知識構成型ジグソー法の授業において、生徒の学びのプロセスを見取るために、クロストークを複数回設定した。また、課題解決の考え方について生徒同士が共有する場を設定したり、思考の過程を明示するためにミニホワイトボードを用いて生徒に説明させたりするなど、授業展開を工夫する授業が見られた。 ○グローバル教育研究発表会研究授業について ・2 月 9 日実施のグローバル教育研究発表会研究授業では、それぞれの実践で多様な評価手法を用いることを計画している。研究授業に向けて、教科会やチーム会で適切な評価方法について協議している。 ★1（第 2 回探究型学習に関する教職員アンケートから）※（ ）は第 1 回（7 月）の割合 「授業で目標を設定し、生徒と共有している」→高等学校肯定的回答 76.5%（76.1%） 「ルーブリックやポートフォリオなどを用いて生徒の学びを評価している」→全体肯定的回答 34.2%（26.9%） 取組② ・外部講師を招へいし「協調学習研修会」（11 月 27 日実施）を開催した。提案授業として「化学基礎（高 1）」を実施し、授業後の生徒の振り返りについて提案した。単元の導入において知識構成型ジグソー法を用い、生徒が課題について主体的に学び、その内容を単元後の振り返りに活用する単元構想について協議した。 ★2（第 2 回探究型学習に関する教職員アンケートから）※（ ）は第 1 回（7 月）の割合 「日々の授業において、毎時間、生徒自身が振り返りを行っている」→全体肯定的回答 57.5%（47.1%） 取組③ ・年間を通じて、グローバル教育に関する校内研修会を実施した。校内研修会（12 月 6 日実施）では、「グローバル教育の視点に立った授業改善について」をテーマに、これまでの取組を振り返り、今後の方向性について各教科で話し合った。特に「生徒が気づき、考え、表現する」授業づくりについてどのような工夫を行い、見取ってきたかを協議し、その成果や課題について確認をした。 ・組織的な授業改善を進めるうえで、生徒に付けたい力を明確にし、それを目標としながら取組を構築する「バックワードデザイン」や観点別評価、授業改善の P D C A サイクルなどの重要性について確認をした。 取組④ ・探究型学習に関するアンケート（7・12 月実施）を全教職員対象に実施し、結果をチーム会と職員会にて周知した。（12 月実施分については今後周知の予定）	※課題を検証するにあたり、「第 2 回探究型学習に関する教職員アンケート（12 月実施）」を用いた。 アンケートは、高知南中高における対象教員（時間講師と実習助手を除く）74 名中 73 名（約 99%）が回答した。 なお、回答については「とてもあてはまる」・「あてはまる」を「肯定的回答」、「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」を「否定的回答」とした。 取組① ● 高等学校では、指導と評価の一体化について研修の機会は設けているが、実践へのつながりが不十分であり、「授業で目標を設定し、生徒と共有している」ことに課題が見られる。（★1 参照） →授業の目標を板書するなど、目標を生徒と共有することをいっそう徹底する。また、適切な本時の目標設定のために、ゴールを明確にした単元計画を作成する。 →次年度も継続的に「指導と評価の一体化を目指す」ととし、全教職員が取り組む。 ● 多様な手法を用いて生徒の学びを評価することについて、校内では実践事例が少なく、検討する材料も少ない。そのため、その効果的な活用について教科会で協議することが不十分であり、事例研究が進んでいない。（★1 参照） →生徒の「思考力・判断力・表現力」を適切に評価するためにパフォーマンス評価を用いる。特に、生徒に身に付けさせたい力を「単元」で設定し、それを見取るための「ルーブリック」を作成することについて教科で協議する。 →本年度取り組んだパフォーマンス評価の評価表や評価方法を教科内で実際に取り組んだ事例をまとめ、次年度に活用できるようにする。 取組② ● 教科会やチーム会で、具体的な事例を用いて生徒の振り返りを活用した授業事例の研究が不十分であり、具体的な方法について協議し、取組の共有化ができていない。（★2 参照） →生徒が振り返りを行うことの効果について教科で話し合い、具体的な方策を考える。 →次年度は、教職員全体が授業評価アンケートの分析を行い、授業改善に活用する。 取組③ ● 日常的に、授業を他の教員に公開したり、あるいは他の教員の授業を参観したりして、自分の授業づくりに生かしていくという意識が十分に醸成されておらず、協働的な授業づくりが進んでいない。 （第 2 回探究型学習に関する教職員アンケートから）※（ ）は第 1 回（7 月）の割合 「授業を校内の他の教員に積極的に公開している（参観を呼びかけている）」→全体肯定的回答 39.7%（30.9%） →学年や教科を越えて、積極的に授業を参観することを奨励する。また、次年度は、授業者と参観者が共に授業力を高めることができるよう授業参観シートの見直しを行う。 →学校は、年度末までに、3 年間の成果と課題を検証し、次年度に向けて、生徒の論理的思考力、判断力、表現力を育成する視点での教科横断的な取組を計画する。 ● チーム会や教科会で取組を検証するには時間が足らず、P D C A サイクルが十分に機能していない。 →学校は、次年度からの研究の方向性を明確にし、教科会やチーム会の具体的な取組を提示する。特に教科会の年間予定を作成し、中高合同教科会で年間を通じて取り組むべきことを明確にしたマネジメントを行うようにする。 取組④ →探究型学習に関するアンケート（7・12 月実施）の結果を分析し、次年度からの指導に活用する。 →中高の各教科における実践事例を集約し、探究型学習における各教科での成果を、年度末までに整理する。そして、3 年間の実践事例集を作成し、県内の中・高等学校に普及啓発する予定である。 →次年度は、ポートフォリオなどの評価と学習の定着度をはかるテスト作成について研究する。

グローバル人材として活躍できる資質・能力を身に付けた生徒を育てるために、組織的・協働的な授業改善を行うことができる。

本年度テーマ	主体的な学びや協働的な学びをととした学習のあり方について	事業内容	高知南：グローバル教育プログラム（英語教育）について
--------	------------------------------	------	----------------------------

概要・目的

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、平成 3 0 年度をイメージして協議する。

P平成 29 年度の当初計画

D平成 29 年度の実行状況

C/A課題（●）と今後の取組の方向性（→）

4つの方向性と7つの方策

探究型学習プログラム+英語教育プログラム 協働による目標達成

方向性①

授業者は指導と評価の一体化を目指す

1. 生徒との目標の共有、目標達成につながる学習活動の設定と評価を通して、学習指導の改善を行う。

- 生徒の学びのプロセスの見取り
- 目標に沿った評価方法の研究
- 英語教育での学習到達目標（CAN-DO リスト）の活用
- グローバル教育校内研修会における教科横断型の研究協議

方向性②

生徒は自己の学びを適切に振り返る

2. 主体的な学びにつながるよう、生徒の振り返りの手立てを工夫する。

方向性③

学校は教科会やチーム会を活性化する

3. 高知南が目指す「グローバル人材」を再確認し、育てたい資質・能力を教科横断的に育成する授業づくりについて、学校全体で取り組む。

4. 組織的・協働的な授業づくりを目指し、教科会、チーム会を活性化

する。

方向性④

学校と教育センターは研究成果を普及する

5. 3 年間の研究成果を集約し、研究の過程や実践事例をまとめる。

6. 教員の授業づくりに対する意識の変化や生徒の学びに関する変容を見取るために、意識調査等を実施し、分析する。

7. 県内の教員のニーズに応えられるよう、教材研究や授業づくり、評価のポイント等の資料を作成する。

取組①②

OCAN-DO リストの活用

・CAN-DO リストから単元の目標を設定し、バックワードデザインで指導計画を立てることが定着してきた。生徒ともその目標を共有し、その単元で身に付けさせたい技能を毎時間指導するようになってきた。

・CAN-DO リストを到達させるには、一人一人の生徒に英語で何ができるようになったかを実感させること、そのためには単元を通して付けたい力を付ける言語活動を効果的に位置付けることが大切だと思う教員が増えてきた。

・「生徒に変容があった」と感じている教員が、昨年度より 43.6%増えている。これは、計画段階で、単元で付けたい力を具体的に英語にして指導したこと、1 時間の目標を言語活動に落とし込み技能面を見取るようになったことが要因として考えられる。

■平成 29 年度高知南中学校・高等学校英語教育プログラム意識調査（教員対象）

① 調査の目的：教員の授業改善への意識、教員による生徒の学習状況等を把握し次年度の研究に生かす。

② 調査対象： 英語担当教員（14 名 中学校：4 名、高校：10 名）

③ 調査時期： 平成 29 年 12 月 (%)

項目	平成 28 年度	平成 29 年度
単元の指導や 1 時間の指導において、バックワードデザインで授業を計画している	100	92.8
CAN-DO リストを単元の指導に関連させる	53.3	92.8
本時のゴールを達成させるための言語活動を設定する	93.3	100
評価規準に基づいて、達成状況を評価する	60.0	71.4
自分自身に変容があった	85.7	85.7
生徒に変容があった	33.3	76.9
これまでの研究は自分のプラスになった		100

○ルーブリックを用いた評価と生徒の振り返り

・文部科学省や高知県教育委員会の指導事例を基に、中高全学年でルーブリックを作成し、それを用いて相互評価や自己評価に活用している。また、ルーブリックを生徒と共有することにより、生徒は次の学習目標を具体的に持つことができるようになっている。

・教科会でルーブリックを活用した事例を持ち寄り、意見交換をした。他学年からの質問や意見を通じて、単元の目標とルーブリックの関連や、各技能の目標の系統性について話し合うことができた。

・英語教育プログラム意識調査（教員対象）によると、生徒と単元及び 1 時間の目標を共有はできているが、高校の授業では生徒の振り返りの設定が不十分である。単元の目標に照らし合わせて、1 時間の指導内容を焦点化する必要がある。

取組③

・教科会で授業改善に関する研修を行ってきたことにより、「英語教育プログラムの研究が自分のプラスになった」と全員が感じている。

・中高連携した指導についてもっと協議をし、中高 6 年間で育てていくという視点を大切にしたいと考えている教員が多い。

・校内研修会（12 月 6 日実施）で、3 年間の取組の成果と課題について話し合った。改善策について話し合うことができていないので、2 月に教科会で協議をする。

取組①②

3 月までの取組

●ルーブリックを十分に検討する時間がなかったため、単元の目標とルーブリックにずれがあった。また、単元の指導の始めに、生徒とルーブリックを共有できなかった。

→3 学期は、単元の指導の前に、学年担当教員間で、ルーブリックを再確認した上で、ルーブリックを活用して、指導する。

→授業者は、3 月に CAN-DO リストの到達状況を取りまとめ、進級学年の指導に生かす。

→次年度の年間指導計画を CAN-DO リストを踏まえて作成する。作成に当たっては、学習指導要領の指導事項と CAN-DO リストから単元の目標を決め、その到達に向けた学習活動を設定すること、ルーブリック作成がスムーズになるよう、目標・評価規準を具体的にすることに留意する。

取組③

3 月までの取組

【教科会】

→2 月の教科会で、12 月に実施した第 2 回英語学習への意識・実態把握調査(生徒対象)、英語教育プログラム意識調査（教員対象）から 3 年間の生徒の変容と指導方法について分析し、次年度の授業改善に生かす。また、英語教育プログラムに基づいて指導してきた中学校 3 年生が高校に進学するので、中高のスムーズな接続について協議をする。

→年度末までに本年度の取組を「平成 30 年度英語教育プログラム冊子」にまとめ、来年度の実践で活用する。

【学校・チーム会】

→学校は、年度末までに、次年度に向けて、生徒の論理的思考力、判断力、表現力、そして、英語運用能力を育成する視点での教科横断的な取組を計画する。

●チーム会や教科会で取組を検証する時間が不足、PDCA サイクルが十分に機能していない。

→学校は、次年度からの研究の方向性を明確にし、3 月のチーム会で、PDCA の確立を反映させたチーム会・教科会の実施計画を作成し、中高合同英語教科会に共有する。

取組④

→学校は、3 年間の研究成果をまとめる。

→教育センターは、中高 6 年間を見通した CAN-DO リストを基に、それぞれの段階の実践事例を整理し、授業づくりについての啓発資料を、本年度末に、県立中学校及び高等学校に配付する。また、教育センターの中学校・高等学校外国語科に関する研修で活用する。

→教育センターは、学校とともに、12 月に実施した第 2 回英語学習への意識・実態把握調査（生徒対象）、英語教育プログラム意識調査（教員対象）から 3 年間の生徒の変容と指導方法について分析し、次年度の授業改善に生かす。

→教育センターは、3 年間の研究を踏まえ、県内の中・高等学校に英語教育プログラムを普及するために準備する。

取組④

- ・学校は研究報告書、教育センターは CAN-DO リストを活用した実践事例を啓発資料として作成しているところである。
- ・教育センターは、12 月に第2回英語学習への意識・実態把握調査（生徒対象）と英語教育プログラム意識調査（教員対象）を実施し、1月の教科会で調査結果の概要を報告した。教員は課題の中から3学期重点的に取り組む項目を決め、授業改善に取り組む。次年度の英語教育プログラムの研究に生かすために、2月の教科会で、英語学習への意識・実態把握調査（生徒対象）と英語教育プログラム意識調査（教員対象）から3年間の生徒の変容と指導方法について分析を行う。
- ・英語学習への意識・実態把握調査（生徒対象）の概要（研究主題に関わる項目を中心に）

表1：平成27年度第1回と平成29年度第2回を比較すると、ほとんどの項目で、肯定的評価をした生徒は増加しており、授業改善の成果が出ている。「英語で自分の意見や感想を言うことが好き」「英語で自分の意見や感想を書くことが好き」と答えた生徒の割合は、中学校・高校ともあまり変化がないが、「まったく好きでない」と答えた生徒は、7.4%～13.9%減っている。

表2：現中学校3年生を平成27年度中学校3年生と、現高校3年生を平成27年度高校3年生と比較するとほとんどの項目で伸びており、ここからも授業改善の成果が見られる。現中学校3年生は1年時と比較すると、「課題に対して自分の考えを持ったり、積極的に英語を使ったりする」ことについて肯定的評価が下がっているが、「自分の意見や感想を伝えることが好き」になっている。現高校3年生を1年時と比較すると、全ての項目で伸びがみられる。授業の理解度についても、14.7%上昇している。

表3：授業の理解度と授業中の言語活動の長さをクロス集計すると、中学校では、相関の傾向がみられ、「授業で英語を使っている時間が長い、かつ授業を70%以上理解している」生徒は、平成27年度より、28.2%伸びている。高校では、授業を70%以上理解している生徒の割合は約10%増えているが、授業の理解度は言語活動を通して理解したものではないことが分かる。再度、学習指導要領の指導事項と CAN-DO リストから付けたい力を設定し、その到達に向け、言語活動の質を高めること、妥当性のある評価方法について共通理解を図ることが必要である。

表1 (%)

	中学校		高校	
	H27 第1回	H29 第2回	H27 第1回	H29 第2回
英語の授業では、課題に対して自分の考えを持っている	74.9	84.2	53.1	65.6
英語の授業では、積極的に英語を使っている	66.5	80.0	42.2	40.4
英語で自分の意見や感想を言うことが好き	27.4	29.5	23.5	22.7
英語で自分の意見や感想を書くことが好き	27.1	39.1	29.0	23.7
英語を学習している理由 （視野が広がるから）	69.4	82.5	68.2	78.2
英語を学習している理由 （これから英語が必要な社会になるから）	80.6	85.8	80.1	79.0
英語の授業を70%以上理解している	49.8	66.3	30.2	41.2

表2 (%)

	中学校1年時 (H27第1回調査8月末)	中学校3年 (H29第2回調査12月)	中学校3年 (H27第2回調査2月)
英語の授業では、課題に対して自分の考えを持っている	88.4	77.3 (-11.1%)	62.4
英語の授業では、積極的に英語を使っている	80.4	75.5 (-4.9%)	66.0
英語の授業を70%以上理解している	55.0	50.9 (-4.1%)	52.3
英語を勉強すると視野が広がるから	69.9	78.9 (+9.0%)	74.3
英語で自分の意見や感想を言うことが好き	27.0	31.8 (+4.8%)	31.2
英語で自分の意見や感想を書くことが好き	36.9	40.9 (+4.0%)	30.3

	高校1年時 (H27第1回調査8月末)	高校3年 (H29第2回調査12月)	高校3年 (H27第2回調査12月)
英語の授業では、課題に対して自分の考えを持っている	55.2	68.1 (+12.9%)	64.0
英語の授業では、積極的に英語を使っている	44.3	54.2 (+9.9%)	47.0
英語の授業を70%以上理解している	31.1	45.8 (+14.7%)	40.0
英語を勉強すると視野が広がるから	61.0	76.5 (+15.5%)	71.3
英語で自分の意見や感想を言うことが好き	17.1	30.9 (+13.1%)	24.1
英語で自分の意見や感想を書くことが好き	25.0	31.6 (+6.6%)	26.7

